

一般発表

## 教育職員免許法施行規則第66条の6に定められる 「体育」の在り方をめぐる挑戦

### 新しいスポーツの創作を通して運動の楽しみ方を考える授業 「スポーツクリエーション」の新設事例

武蔵野美術大学 北 徹 朗

キーワード：大学体育，美術大学，スポーツを創る，スポーツクリエーション

#### 事例報告の目的

北ら（2019）は教育職員免許法施行規則第66条の6（以下、法令）に定められる「体育」の開講コマ数と免許取得者数・教員数の関連について分析している。首都圏の美術系大学の状況を概観すると、法令があるが故に、半ば仕方なく体育を開講している印象が否めないカリキュラム配置や、専任教員不在（3名→0名）の大学が散見されたが、法令に縛られないカリキュラム展開の大学も見られた、としている。

本研究では、想像性・創造性を重視する美術系大学の体育授業の在り方を模索する挑戦的な試みとして「スポーツを創る」授業を新設した。前述の先行研究で示したように、既に一部で崩壊的な状況とも見てとれる美術系大学の教養体育について「美大の教養体育はこれだ！」という、先進的な事例を示すことと、試行した授業経過をまとめ、今後の授業開発や改善に生かして行くことを本研究の目的とした。

#### 授業の概要・展開

2021年度、武蔵野美術大学では「スポーツクリエーション演習」（担当：北 徹朗）を新設した。この授業は、前期・後期ともに火曜日2限目に開設される半期完結の2単位授業であった。

第1回目の授業では、スポーツ実施の阻害要因を知るための資料として『スポーツの実施状況等に関する世論調査』（スポーツ庁）を読み解く内容で構成した。特に若年女性が運動不足を感じやすい傾向にあるなど、本学の特徴（女子割合約75%であることやスポーツ経験が少ない者が多い）と類似していることから、「低実施群」当事者としてのアイデアを抽出し、クリエーションに生かすことを念頭においた。

また、この授業には稲見昌彦教授（東京大学先端科学技術研究センター）を特別講師として招聘し、身体情報学や超人スポーツ等の発想から「未来の身体とは何か」について考え、進化するテクノロジーを駆使した新しいスポーツ創造への発想に繋がる知識提供の機会とディスカッションの時間も設定した。

美大生の想像力・創造力を生かした「新しいスポーツを自ら創る」という新しい体育授業の試みとして、今年度は大きく3つの課題を提示し展開した。

- ・第1課題：ムサビ体操を創る
- ・第2課題：コロナ下での新しいスポーツを創る
- ・第3課題：私の好きなスポーツの開発

これらの課題は、まず各個人がアイデアを起こし、それを3～4名のグループで共有した。コンセプトや意図、ルール設定、運動効果、安全性などのディスカッション、そしてフィールドでのリハーサルを繰り返し行わせ、最終的に各課題ごとにグループで1つの作品を提出させた。グループ毎のプレゼンを経て、受講者全員で体験した。そしてさらに、よかった点、わかり難かった点等を共有し、各グループの作品にフィードバックする、という方法で行った。

#### まとめと期待

現状、既存のスポーツを教材とした授業運営が主流であるが、自大学の学生の状況や嗜好性等の特徴、あるいは学科や専攻の特質を考慮した、独自のカリキュラム開発がもっと進むべきだろう。「自らが楽しいと思えるスポーツを創る授業」という発想は、美大にとどまらず、広く「スポーツ実施率向上」の観点からも極めて重要と考える。大学の特色に応じた体育の在り方が、もっと議論されるべきではないか。

## 大学体育授業におけるルーブリック評価表作成の試み

中村学園大学 田村孝洋  
西田明史

キーワード：バレーボール・シッティングバレーボール，自己評価，振り返り，計量テキスト分析

### 目的

本研究では，大学体育授業において，学生の学修状況や達成度を適切に反映させることにより，学生にとって理解しやすいルーブリック評価表の作成を試みることとした。

### 方法

調査対象は，2021年度後学期開講の「生涯スポーツ実習」の受講学生206名とした。調査では，7項目の行動目標について，S～Dの5段階の成績評価基準から達成度を選択させ，その選択理由について自由記述の回答を求めた。分析は，回収数201件から不備を除いた199件を対象とした。記述内容の分析には，計量テキスト分析ソフトKH coder 2.00fを用いた対応分析，階層的クラスター分析および共起ネットワークが使用された。

対象授業では，オンデマンド方式による3コマ分の理論学習を経て，対面実技方式にてバレーボールとシッティングバレーボールを各5コマ，計10コマ実施した。授業では，誰もがプレイを楽しめるように，学生がクラスの実態に応じた独自ルールを創り上げる機会を設けた。

### 結果

ここでは，行動目標「a. スポーツに関わる基本スキルの実践」に限定して述べることとする。

自由記述回答に頻出する語と自己評価の対応分析を行った。分析には，最小出現数8回以上の83語のうち，差異が顕著な上位60語を使用した。その結果，第1成分（寄与率：54.41%）を見ると，正の方向には「スキル」「レシーブ」「スパイク」などの【技術】に関する語が分布しており，負の方向には「ポジション」「作戦」「考える」などの【戦術】に関する語が分布している。第2成分（寄与率：27.29%）を見ると，正の

方向には「集団的」「状況」「周囲」「役割」などの【対集団】に関する語が分布しており，負の方向には「個人的」「経験」「行動」「得意」などの【対個人】に関する語が分布している。なお，S評価は第二象限（戦術×対集団），A評価は原点付近，B評価は第四象限（技術×対個人）に位置付けられている。

さらに，自由記述回答に頻出する語と自己評価の関係性を示す共起ネットワークを描いた。「役割」は，S～Cの各評価との共起関係が見られ，スポーツに関わる基本スキルの実践の中心的なテーマだと考えられる。同様に，「スキル」はA～Cの各評価に共通するテーマであり，「積極性」はSおよびA評価に共通するテーマだと考えられる。また，「ボール」「自分」「思う」「ゲーム」「バレーボール」「チーム」「考える」の7語はS～Bの各評価に共通していた。

### 考察

結果を踏まえると，行動目標「a. スポーツに関わる基本スキルの実践」の評価基準作成のポイントは，基本スキルを個人的な視点から集団的な視点へ拡大させていくとともに，単なる技術だけではなくゲーム内外での戦術を伴うスキル変化にも焦点を当てたことにある。本研究で作成した評価基準は，学修者の自己評価に基づいており，教える側と学修者の間での共有がスムーズとなるばかりでなく，学修者から見て信頼性を持った内容だと考える。ただし，妥当性の検討に関しては本研究の内容には含んでおらず，今後の授業において活用して検証することが課題と言える。

一般発表

# 大学体育授業での履修者の行動と授業前後での社会的スキルの変化

## —授業開始時点での社会的スキル獲得状況に着目して—

福岡大学, 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 伊藤 奨  
福岡大学 山本 泰暉  
藤井 雅人

キーワード：大学体育授業，社会的スキル，履修者の行動

### 目的

近年，大学生の対人関係能力の低さやストレスに対して適切な対処ができない等の問題が指摘されている。大学教育においてこうした問題の改善は急務であり，学生の社会的スキルや大学適応度の向上を促すとされる大学体育授業にも小さくない期待が寄せられている。これまでに，大学体育授業が社会的スキル（Social Skill, 以下 SS）に与える効果は報告（中澤と上野，2016）されているものの，授業内での履修者のどのような行動が SS の向上に影響しているかについての知見は少ない。本調査では，授業開始時点での SS に応じて群分けを行い，各群の授業前後での SS の変化と，各群内で授業前と比較した授業後の SS が比較的向上した履修者の授業内での行動を調査し，その特徴について言及する。

### 方法

調査対象は，F 大学における 1 年次必修科目である「生涯スポーツ演習Ⅱ」を履修する学生とし，Google フォームを用い，下記の 2 つの調査を行った。

- ①社会的スキル調査（菊池ら，1998）。〈授業開始前・授業終了時〉
- ②授業内行動に関する調査

下記12の行動を授業内で行ったかどうか。

「話しかけたか・話題提供・仲間への指示・失敗の自認・感情制御・感情表現の抑制・建設的な会話・利他行動・傾聴・冷静な対処・役割・目標」

（全質問選択肢：0 回・1 回・複数回）。〈毎授業後〉

調査に同意し，かつ全質問に正確に回答した160名（男子62名，女子98名）を有効回答とした。初めに，授業開始時点の SS を基準に 3 群（高 SS 群・中 SS 群・

低 SS 群）に分類し，各群の授業前後での SS を比較するため，対応のある  $t$  検定を行った。次に，授業後の SS の向上レベルを基準に，各群を向上度上位群と下位群の 2 群に分類した。その後，各群内での SS 向上度上位群と下位群の授業内行動比較のため，対応のない  $t$  検定を行った。統計解析には SPSS ver. 25.0 を使用し，有意水準はすべて 5 % 未満とした。

### 結果と考察

全ての群において，授業後の SS は授業前と比較して高い値を示した ( $p < 0.05$ )。低 SS 群の向上度上位群は下位群と比較してより高い頻度で「話題提供・傾聴・利他行動・冷静な対処・役割・目標」に関わる行動をとっていた ( $p < 0.05$ )。中 SS 群では，上位群が下位群と比較してより高い頻度で「建設的な会話」に関わる行動をとっていた ( $p < 0.05$ )。高 SS 群では，いずれの行動に関しても有意な差は見られなかった。東海林ら（2013）の調査でも，授業開始時点の SS に応じた教材の選択が SS の向上のために重要であることが報告されている。本調査の結果から，低 SS 群と中 SS 群では，前述の行動を促すような教材を授業内で取り扱うことが SS の向上に繋がると考えられる。さらに，本調査では，比較的 SS が向上しづらいとされる高 SS 群（東海林，2013）においても SS が向上した。しかし，履修者のどのような行動が SS の向上と関係しているかまでは明らかにできなかったため，今後，さらなる検討が必要だろう。本調査の結果を受け，今後は，実際にどのような種目を取り扱うことで履修者にどのような行動が誘発されるかを調査し，授業前の SS に応じた適切な体育授業プログラムの開発が求められる。

## 企画趣旨

福岡大学 藤井雅人

キーワード：一般体育授業，根源的価値，学習者，教授者，教授学モデル

### 1. はじめに

本シンポジウム「『一般体育担当教員に求められるもの』を整理する ― その2 ―」は、演者のお一人でもある杉山佳生前九州地区大学体育連合（九体連）会長による「『一般体育担当教員に求められるもの』を整理する」というシンポジウム企画を引き継いだものである（ただし、令和元年度の春期研修会がコロナ禍で中止となったため、杉山氏による同企画は令和2年度発刊の本機関誌（第21巻第1号）に「誌上フォーラム」という形式で発表されることになった）。そのオリジナルの企画の意図等については杉山氏に譲るとして、その第2弾の企画者の視点から本シンポジウムの企画趣旨について述べてみたい。

### 2. 学習者を中心とした問題設定

現代社会の急激かつ大きな変化は大学教育にも変革を要求することになる。このことは、実際に大学の教育現場で働く私たち教員の多くが日々感じていることでもあろう。そうした大学教育の変化は当然、その枠組みの中で展開される一般体育授業にも影響を及ぼすことになる。そもそも大学教育において、一般体育授業の学習者は、「なぜ」「何を」「どのように」学ぶよう求められるのであろうか。こうした視点は、大学教育における他の科目との比較・競争の中で、一般体育授業の存在価値を探ることに他ならない。九体連は、令和3年8月29日に開催された九州体育・スポーツ学会との合同企画による夏期研修会において、コロナ禍にあって一般体育授業のイノベティブな試みが日本全国の大学で多くなされている中で、あえて一般体育授業の根源的な価値を議論することで、こうした問題に取り組むこととなった。しかしながら、この夏期研修会での取り組みは、一般体育授業の価値が様々な立場から設定可能であるということもあって、問題を考えていくきっかけとはなったものの、今後も引き続き議論が必要であろうという点を示唆するにとどまっ

た。

一般体育授業をめぐる価値といっても、教材としての運動・スポーツの内在的価値と外在的価値（中核的スポーツ価値と周辺的スポーツ価値）のいずれの価値を一般体育授業の核に据えるのかという問題でさえ、学習指導要領がなく、しかもAP・DP・CPといった各種ポリシーが大学でそれぞれ異なるという理由から、一般体育授業全体に統一的な方針を打ち出すことは難しかろう。例えば、スポーツのプレイ論的価値、すなわち内在的価値の体験を重視するという方向性や、ライフスキル、コンピテンシー、特に最近一般体育授業の学習成果としてもよく測定されている社会人基礎力といった力の涵養、つまり外在的価値を重視するという方向性は、一般体育授業にとっていずれも重要と考えられている。さらに、本企画者の本務校では一般体育授業が健康教育の一環と明確に謳われているように、心身の健康の促進や、梶田氏（2021）によって言及されているマナー教育（挨拶・美化）の実践なども同じく重視されるであろう。ひょっとすると、内在的および外在的価値のさらに外側に置かれる、スポーツの経済的価値や鑑賞的価値などといった派生的価値にベクトルを向けるという一般体育授業の立場もあるのかもしれない。さらに大学生という存在をトランジションモデルあるいはモラトリアムモデルのいずれの立場で捉えるかで（Neuber, 2020）、一般体育授業の展開の際に、将来指向型つまり外在的価値重視か、現在指向型つまり内在的価値重視か、いずれの立場に重きを置くのかは異なってくると思われる。

### 3. 教授者を出発点とした考察の必要性

つまりは、前述の夏期研修会のように学習者を中心とした問題の設定において、一般体育授業の根源的な価値を探るのは容易でないということである。そこで、本シンポジウムでは、少し見方を変えて、教授者、すなわち一般体育担当教員にフォーカスして議論して



みたいと思う。体育授業の展開にとって、学習者と教授者は車の両輪ともいえ、学習者が「なぜ」「何を」「どのように」学ぶのかという問題は、教授者の力量に左右されることになるし、そもそもそうした学びのために教授者にはどのような力量が求められるのかという視点を欠くことはできないであろう。前述してきた学習者への視点と本シンポジウムで取り組む教授者に関連する問題意識とを有機的に結びつけた考察が一層不可欠になってくるように思われる。

図1は、ドイツスポーツ教育学の教科教育論で非常に有名な教師・事象・生徒からなる「トライアングル型」の教授学モデルである。生徒を大学生と読み替えることも可能である。このモデルは授業を構成する3者の関係をシンプルに示しており非常にわかりやすいが、しばしば教師が事象を生徒に仲介する伝達者に過ぎないという批判を受けることになる。

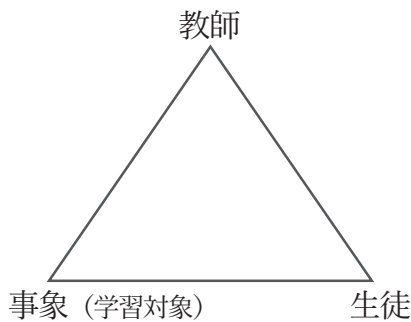


図1：トライアングル型教授学モデル (Neuber, 2020, p.11)

そこで考えられたのが、教師を中心に据えた「星型」の教授学モデルである（図2）。このモデルは、制度、時間、施設などの諸条件、学習する内容、生徒といった授業の成立要件と教師とのダイナミックな関係を前提としている。先に述べたとおり、本企画者は、一般体育授業の学習者が「なぜ」「何を」「どのように」学ぶのかという視点と、図2のモデルが示唆するように教授者が一般体育授業の中で、その様々な成立要件とのかかわりにおいて、どのような機能・役割を果たすべきであるのかという視点を関連づけて考察していく必要があると考えている。本シンポジウムでは、その意味で、まずは教授者の視点から一般体育授業について議論できれば幸いである。

本シンポジウムの構成は、オリジナルの企画者でもある杉山氏（九州大学）に、「一般体育担当教員に求められるもの」の全体像についてお話しいただき、次いでその中の「心理社会的スキル教育」に関して詳し

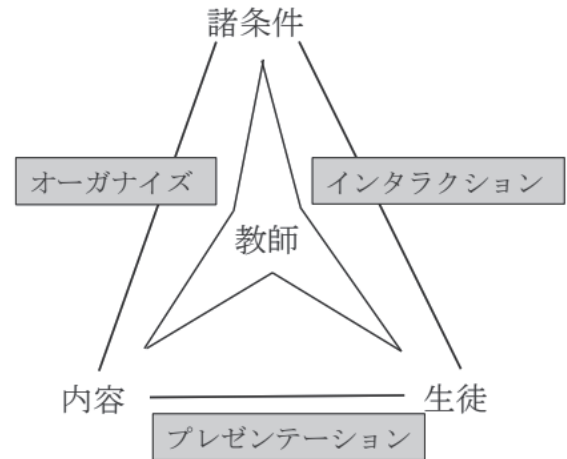


図2：星型教授学モデル (Neuber, 2020, p.13)

くご講演いただく。次いで、山田力也氏（西九州大学）に、杉山氏が「一般体育担当教員に求められるもの」の1つに位置づけている「ダイバーシティおよびインクルージョン理解」について、特にアダプテッド・スポーツの視点からお話しいただく。お二人のご講演の後には、参加者のみなさんも交えながら「一般体育担当教員に求められるもの」についてディスカッションしてみたい。その際には、ご自身が授業実践されている、あるいは構想されている事例なども情報共有させていただければ幸いである。

### 参考文献

- 梶田和宏. 社会人基礎力の育成向上の観点から（特集「リベラルアーツにおける大学体育の意義」）. 体育・スポーツ教育研究, 22 (1) : 33-39, 2021.
- Neuber N. Fachdidaktische Konzepte Sport. Zielgruppe und Voraussetzungen, Springer VS, 2020.

## 改めて「体育における心理社会的スキル教育」とは何かを問う

九州大学 杉山佳生

キーワード：心理社会的スキル，学修・修得，経緯・実情・課題

### 1. これまでの経緯

まず、本シンポジウムに先立つオリジナル企画が立案・実施されるに至った経緯をお示しする。2019年9月1日に実施された本連合夏期研修会において、一般（教養）体育授業担当教員資格認定制度を設けてはどうかという提案がなされた（この報告は、本機関誌第20巻第1号 p.29に掲載されている）。これを受け、杉山（当時の企画委員長）が、2020年3月の春期研修会で、一般体育担当教員に求められる知識や技能を整理するための意見交換を行う企画を立案した。その企画趣旨の中で、教員に求められる知識・技能として、「アクティブ・ラーナーの育成」、「ダイバーシティ&インクルージョン理解」、「心理社会的スキル教育に関する知識」、「大学理念等に沿った教育を行う技能」を例示し、当該の春期研修会では、「アクティブ・ラーナーの育成」と「大学理念等に沿った教育を行う技能」を取り上げ、前者については島根大学の須崎康臣先生に、後者については東北大学の藤本敏彦先生に、それぞれお話しいただくこととした。残念ながら、コロナ禍の影響により、春期研修会自体が中止となり、直接お話を伺うことはできなかったが、本機関誌第21巻第1号 pp.16-23に、「誌上フォーラム」の形で、ご報告いただいた。

今回のシンポジウムでは、「求められる知識・技能」の残りの2つに焦点を当て、杉山が「心理社会的スキル教育に関する知識」について説明することとなった。

### 2. 心理社会的スキル教育について

本シンポジウムでは、健康・スポーツ教育と心理社会的スキル教育のつながり、および、心理社会的スキルの詳細について、具体例を挙げながら説明をした。以下、その要点を列挙する。

#### 1) 九州大学「健康・スポーツ科学演習」の内容

九州大学では、2014年度より、全学必修科目である

「健康・スポーツ科学演習（1年次前期開講）」において、「4種の心理社会的スキル\*（ストレス対処スキル、目標設定スキル、リーダーシップスキル、コミュニケーションスキル）を、運動・スポーツ実践を通して修得・向上させること」を目標の1つに掲げている。これらの心理社会的スキルの学修では、基礎的知識を修得するだけでなく、当該スキルを実践的に活用できるようにすることも目指している。

※履修要項等の公式文書では、「ライフスキル」と表記している。

#### 2) 心理社会的スキルとライフスキル

心理社会的スキル（psychosocial skills）と密接に関連する（しばしば同義で用いられている）用語に、「社会的スキル（social skills）」、「心理的スキル（psychological skills）」、「ライフスキル（life skills）」がある。このうち、ライフスキルは、「日常生活の様々な問題に対処するために用いられるスキル」と定義されており、「場面」を特定しているという点で、包括的な用語である「心理社会的スキル」とは若干異なったニュアンスを有している。このことから、体育・スポーツ場面で修得されるスキルは「（体育・スポーツ場面で有効な）心理社会的スキル」、それらが日常場面でも用いられるように「般化」されたスキルを「ライフスキル」と称するべきと考えている。

ちなみに、この他にも、様々な類似の概念・用語が提唱されており、それらには、「非認知能力」、「社会人基礎力」、「学士力」、「就業力」、「人間力」、「21世紀型スキル」、「トランスファラブルスキル」などがある。

#### 3) スポーツを通じた心理社会的スキル教育

スポーツ実践活動を活用して心理社会的スキル教育を行うことのメリットには、以下のようなものがある。

・「心理社会的スキル（例えば、コミュニケーション

スキル)が低いがために、それらを修得・向上させるトレーニングを必要とするが、それをあまり表立って行いたくない」という人にとっては、運動やスポーツをしながらそのようなスキルを身につけることができるとなれば、トレーニングにも参加しやすくなると思われる。

・運動スキルを修得するノウハウは体育・スポーツ実践場面で学ぶことができることから、そのノウハウを心理社会的スキルの学修にも活かすことで、効率的に心理社会的スキルを身につけることが可能になると考えられる。

ただし、単にスポーツをしているだけで、心理社会的スキルが身につくというわけではない。そこには、適切な教育・学修が必要である。加えて、心理社会的スキルの修得と人格形成は等価ではないことを念頭に置いておくべきである。スキルは、あくまで「対処技能」であり、必ずしも「人間的な深さ」を示すものではない。「教育」という観点から見れば、「人格（人間性）」は、実践的な教育の場において扱いにくい（教えるにくい）概念であるが、「スキル」であれば、運動スキルと同様に扱えることから、教えるやすく、学びやすいと言える。

なお、学習理論に基づけば、「一時的にできるようになること」と「学習（身につけること）」とは同一ではない。この点からも、心理社会的スキルの修得・向上には、時間をかけた繰り返しの練習が必要になる。

#### 4) 心理社会的スキル教育の実際

前述したとおり、九州大学基幹教育の健康・スポーツ科目の演習・実習授業では、4種の心理社会的スキルの修得・向上（より正確に言うならば、スキルを真に修得するためには時間を要することから、「スキルを修得するための方法」の修得）を目指している。ここでは、その概要に触れておく（なお、実習については、主に杉山が実践している内容を取り上げている）。

##### (1) ストレス対処スキル

テキスト（「実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学 改訂版」大修館書店）では、ストレスと健康の関係や、ストレスへの対処法について述べている。また、スポーツの心理に関わる箇所において、「不安多次元理論」をベースとした認知的対処法についても触れている。実習では、リラクゼーション技法の紹介と試行に時間を割いている。

##### (2) 目標設定スキル

テキストでは、スポーツ心理学領域で発展してきた目標設定スキルについて、その効用（モチベーションの維持など）と原則（「難しいが、達成可能な目標を立てる」など）について論じている。実習では、体力テストの結果を活用して目標を設定し、それを達成するためのトレーニングプログラムを作成させたり、グループ・チーム目標を立てて、スポーツ活動を行わせたりしている。

##### (3) コミュニケーションスキル

テキストでは、シンプルな「情報処理（情報交換）モデル」を紹介し、非言語的なコミュニケーションチャンネル（身体動作、対人距離など）の重要性を説いている。実習では、言語的および非言語的チャンネルを用いたコミュニケーションスキルの練習ができるような工夫をしながら、スポーツ活動を実践させている。

##### (4) リーダーシップスキル

テキストでは、「リーダーは、グループの目的や特徴に応じて、行動スタイルを変える必要がある」という理論を取り上げるとともに、フォロワーシップ（メンバーシップ）の重要性について説明している。実習では、「グループやチームの誰もがリーダーシップを発揮できる」、「リーダーでない時には、フォロワーシップを発揮することが望まれる」といった点を意識させて、チームスポーツを実践させている。

### 3. 今後の課題

一般体育担当教員が身につけるべき知識や教育技能は、心理社会的スキルに限ったとしても多岐にわたっており、その他の内容も含めると、かなりの分量となる。したがって、資格を認定するかどうかはともかくとして、一般体育担当教員に資する研修プログラムを作るのであれば、教育内容を精査したうえで、適切に体系化する必要がある。例えば、基礎科目としては、冒頭で挙げた「アクティブ・ラーナーの育成」、「ダイバーシティ&インクルージョン理解」、「心理社会的スキル教育に関する知識」、「大学理念等に沿った教育を行う技能」などの科目を配置し、それに加えて、応用実践科目として、「運動・スポーツ課題を用いて、基礎科目で取り上げた内容の実用化を促進するような授業」を設計・実施しうる技能の向上を目指す実習科目を準備することが望まれる。今後の九州地区大学体育連合での取り組みに期待したい。

## ダイバーシティ&インクルージョン理解の必要性について

― アダプテッド・スポーツの視点から ―

西九州大学 山田力也

### 1. はじめに

ここではまずダイバーシティ&インクルージョン (Diversity & Inclusion) の言葉について整理したいと思います。

ご存じの通り、ダイバーシティ (diversity) は多様性や相違点、インクルージョン (inclusion) は包含や包摂という意味です。もう少し詳しく見てみると、ダイバーシティは人々の違い (個人の差異) を意識した言葉であり、多様性のある状態をつくることに焦点を当て、さまざまな環境を整えるという考え方に近いものです。そして、インクルージョンは人々が一体になる (社会による包摂) を意識した言葉であり、人々が対等に関わり合いながら社会に参加している状態をつくることに焦点を当て、一人ひとりが自分らしく社会に参加できる機会を創出し貢献している状態をつくるという発想に基づいています (堀田, 2008)。

「ダイバーシティ&インクルージョン」は、もともとビジネス用語として使用されてきた歴史があります。例えば、中村 (2018) が「ダイバーシティ&インクルージョンは、企業に所属する (将来、所属するであろう人材も含む) 多様な人材 (性別、年齢、国籍、

障害、キャリア、働き方など) を活かし、それらの多様な人材が有する顕在的能力、あるいは潜在的な能力を最大限に発揮することが可能な機会を提供することを通して、所属企業における新たな収益機会を取り込むためのイノベーションを生み出し、新たな価値の創造に繋げる人材活用戦略である」とし、さらに、「ダイバーシティ&インクルージョンが浸透した企業は、エネルギーと創造性に満ち溢れ、場内に多様な意見が自由に飛び交い活気溢れる状態になっている」としています。

これを一般の社会で解釈すると、文献などでも数多の説明がなされていますが、大阪市 (2016) が次のように説明しています。「多様性がない状態では、少数者が排除され、または多数派に同化しなければならないような状況に陥る。次に、ダイバーシティ (多様性がある状態) は、多様な人が存在しているものの、それぞれの強みや特性などが組織などにおいて生かし切れておらず、暗黙的な区別や排斥が起こる状態である。そして、ダイバーシティ&インクルージョン (多様性が受容される状態) になると、多様な人たちがそれぞれ、自分らしく貢献し、影響し合い成長でき、組

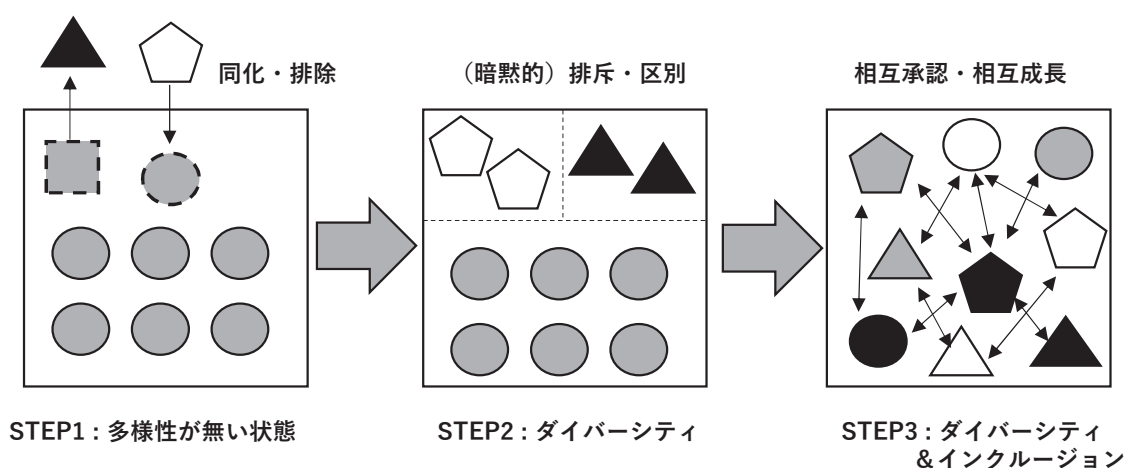


図1. ダイバーシティ&インクルージョンの概念図 (出典: 堀田 (2008) を筆者改編)



織の価値や個人のモチベーションがアップする」としています（図1）。

このことから、ダイバーシティ&インクルージョンは、「多様性の受容」または「多様性が受容される状態」として理解することができます。

## 2. スポーツによる「ダイバーシティ&インクルージョン」

ここでは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京オリ・パラ大会とする。なお、東京2020オリンピック大会を東京オリンピック、東京2020パラリンピック大会を東京パラリンピックとする）をとおして、スポーツによる「ダイバーシティ&インクルージョン」を確認してみることにします。

まずはLGBT等の性的マイノリティであることを公表した選手の人数についてです。「多様性と調和」が基本コンセプトの一つとして掲げられた東京オリンピックでは、自身の性自認や性的指向を公表したアスリートは少なくとも163人を数えたといえます。そして、「多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場」をその開催意義とするパラリンピックにおいても、東京パラリンピックでは28人のアスリートが公表し、両大会共にリオ大会（前回）の2倍を超える史上最多の人数となりました（Outsports, 2021）。

次に、男女混合種目です。その中でも、今大会から採用された卓球男女混合ダブルスで初代王者となった伊藤美誠選手と水谷準選手のペアについては記憶に新しいと思います。東京オリンピックの男女混合種目は、前回大会の2倍となる過去最多の18種目、東京パラリンピックでは34種目が実施されています。

そして、東京パラリンピックで発足した「WeThe15」を紹介しておかなければなりません。WeThe15は、差別をなくし、世界の12億人もの障がい者の生活を変化させ、インクルーシブな社会の一員になるようにすることを最終達成目標として、スポーツ、人権、政策、コミュニケーション、ビジネス、芸術、そしてエンターテインメントにおける世界中の国際組織を史上最大規模で結集させ、今後10年間のキャンペーン活動で変化を起こしていくことにしています（WeThe15, 2021）。そして、この活動では6つの目的が掲げられており、その一つを「障がい者をダイバーシティ&インクルージョンの中心に配置すること」としています。

この活動を含めて東京オリ・パラ大会は、これまで

スポーツ活動に関心を持っていた人々にとっては改めてとなりますが、これまで関心を持っていなかった人々にとっては、スポーツ（活動）を通じた「ダイバーシティ&インクルージョン（多様性が受容される状態）」と、国民一人ひとりが豊かな人間性を育み生きる力を身に付けていくとともに、国民皆で子供や若者を育成・支援し、年齢や障害の有無等にかかわらず安全に安心して暮らせる社会「=共生社会」（内閣府）の実現の可能性に気づかされる貴重な機会であったといえます。メガイメントとしてのオリ・パラ大会は今後もその影響力・効果を持ち続けることでしょう。

ただし、特にパラリンピックについては注意が必要です。オリンピックが一般の人とは違う高度な身体能力を持っていることは安易に理解できますが、パラリンピアンから伝わるメッセージの読み取りは必ずそのようにはいかず、パラリンピアン以外の全ての障がい者への過度な期待につながる可能性があり、場合によっては以前より悪い印象を抱いてしまう恐れがあることも指摘されているところです（渡, 2019）。

## 3. アダプテッド・スポーツについて

この言葉の造語ともいえる「アダプテッド・スポーツ（Adapted Sports）」は「障がい者スポーツ」と解釈されることも多いですが、藤田（2006）によれば、「障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す。青年期の男性を中心に開発継承されてきた近代スポーツに対するオルタナティブでもある」とされています。

障がい者の体育、スポーツ、身体活動全般を指す言葉として1980年代後半頃から各国で広く使われている「アダプテッド・フィジカル・アクティビティ（Adapted Physical Activity）」があります。これが意味するところは、スポーツのルールや用具、運動の仕方（技術）を個人の身体状況や知的な発達に応じて作り変えるということです（藤田, 1999）。

このように、社会による社会的弱者はもちろん、運動を苦手とする人々も対象とする「アダプテッド・スポーツ」は、近年の福祉社会構築におけるノーマライゼーションやQOL（生活の質）、共生などの思想の拡がりを受け、ある特定の人々のための近代スポーツを超えて、2011年に施行されたスポーツ基本法の前文にも記された「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」にもあるように、全ての人々がスポーツを楽しむことを権利として保障して

いこうとする時、非常に重要なキーワードとなります。

また、みんなが一緒に参加（プレー）できることを強調した「ユニバーサルスポーツ」という言葉も散見されつつあります。

#### 4. おわりに

本稿では、大学一般体育担当教員に求められるものとして、ダイバーシティ&インクルージョン理解の必要性について、その意味解釈および概念を中心に説明してきました。

人をスポーツのルールに合わせるのではなく、「アダプテッド・スポーツ」の視点をヒントに、人に合わせたルールの変更や道具の工夫がなされ、誰もがスポーツを楽しめるようにする。それが性別や年齢、障がいの有無等にとらわれず皆が一緒に楽しくスポーツを行える場づくりの土台になる。

つまり、スポーツによるユニバーサル化が模索されることになり、そのことがスポーツを通じた「ダイバーシティ&インクルージョン」および「共生社会」への気づきを促す機会になるのです。

大学一般体育の場もその土台を担えるようにしていきたいものです。

#### 参考引用文献

- 藤田紀昭. アダプテッド・スポーツ. (社) 日本体育学会監修, 最新スポーツ科学辞典, 平凡社: p. 17, 2006.
- 藤田紀昭. 「スポーツと福祉社会 — 障害者スポーツをめぐる」, 井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社: 285-286, 1999.
- 堀田恵美. ダイバーシティに代わる注目のキーワード「インクルージョン」, 企業と人材 5, 2008.
- 中村豊. 日本企業のダイバーシティ & インクルージョンの現状と課題, 高千穂論叢 53 (2), 2018.
- 内閣府. 共生社会政, <https://www8.cao.go.jp/souki/>, 2022年3月3日参照.
- 大阪市. 大阪市人権だより KOKORO ねっと 28, 2016.
- Outsports. At least 186 out LGBTQ athletes at the Tokyo Summer Olympics, by far a record. 2021/09/22, <https://www.outsports.com/olympics/2021/7/12/22565574/tokyo-summer-olympics-lgbtq-gay-athletes-list>, 2022年3月3日参照.
- 渡正. 「パラリンピックは多様性のある社会を実現できるのか?」, 友添秀典・清水論編『現代スポーツ

評論40』創文企画: 148-152, 2019.

WeThe15. <https://www.wethe15.org/ja>, 2022年3月3日参照.

特別講演

# これからの一般体育担当教員に求められる資質・能力

## —全国大学体育連合の顕彰制度や研修内容から—

文教大学，全国大学体育連合顧問 小林 勝法

キーワード：大学体育の定義，教員採用条件の動向，キャリア開発，高等教育のDX

### 1. 大学体育の理念と定義の変遷

戦後の学制改革によって新制大学の教育課程に体育が位置づけられたが，その理念，すなわち，健康の保持増進とスポーツ・レクリエーション，課外スポーツ振興は変わっていない。しかし，時代と社会の変化に合わせて，図1のように定義は変遷している。1991年の大学設置基準の大綱化と2000年代の学士課程教育の充実化という変化にあっても，体育は新しい定義を得ることによって教育課程に位置づけられてきた。今般の高等教育のDX推進に合わせて体育も再定義を求められている。



図1. 大学体育の再定義

### 2. 大学教員の資格要件と近年の採用条件の動向

大学教員の資格要件は，職位ごとに大学設置基準（第13条～第17条）に定められている。その中で，「芸術，体育等については，特殊な技能に秀でていると認められる者」とあるが，これは実技系の専門体育の教員に適用するものであるため，一般体育の教員に適用しないように留意が必要である。

J-RECIN に2006年度から2020年度に掲載された体育・スポーツの教員公募の採用条件を見ると，有期雇用比率は年々高まっており，2020年度は助教が89.5%

でもっと高く，講師が69.0%，教授と准教授が60%程度であった（小林，2021）。選考方法として模擬授業を行う公募は年々増えており，2020年度は55.1%であった。大学教育改革に伴い教育能力を重視する傾向が強まっていることの表れであろう。体育科教育や幼児体育専攻でないのに，教員免許を要求する比率も増えており，最近では10%前後となっている。

近年では，学士課程で体育学を専攻していなかったり，教員免許を取得していなかったりする教員が増えていることからFDの必要性が高まっている。小林・山口（2012）は大学教養体育のFDの内容について図2のように体系化して示している。

対象者	分野	内容
大学院生	教職教養	教育原理、学習理論、カリキュラム論、授業法、カウンセリング、教育関係法令
	体育学専門基礎	体育科教育、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学、体育史、運動学、生理学、衛生学、学校保健、栄養学、解剖学、病理学、スポーツ医学
	実技指導技術	実技指導技術
	大学教養体育論	大学教養体育の理念と現状
初任教員	高等教育論	高等教育の現状と課題
	大学教員論	大学教員の職業とライフコース
	大学教養体育論	大学教養体育の理念と歴史、現状、課題
	高等教育論	高等教育の現状と課題、関係法令と行政
	大学教員論	大学教員の職業倫理とライフコース、FD
	研究のマネジメント	研究のマネジメント
中堅教員 主任教員	実技指導技術	実技指導技術
	大学教授法	大学教授法、授業設計(シラバス作成)、成績評価
	授業・カリキュラム研究法	授業・カリキュラム研究法
	高等教育論	教養教育論
	授業とカリキュラム開発	授業開発とカリキュラム編成論
中堅教員 主任教員	教員管理	教員採用と研修
	施設・用具管理	施設・用具管理、予算管理
	FD活動と点検・評価	FD活動の計画と実施、点検・評価
	大学連携と地域貢献	大学連携と地域貢献

図2. 大学教養体育のFD

### 3. 全国大学体育連合の顕彰制度

全国大学体育連合が行っている個人表彰制度を図3に示す。連合への貢献のほか，実技研修の実績や研究業績に関して評価している。これらの受賞者が増えることは外部からの評価を高めることになるので，積極的に応募することを期待する。

## 全国大学体育連合の個人表彰制度

- (1) 全国大学体育連合賞 (2010年度～、旧功労賞)  
本連合の運営に貢献した教員等
- (2) 大学体育教育賞 (2010年度～、旧功労賞)  
大学体育の発展に貢献した教員等
- (3) 大学体育研修精励賞 (2010年度～)  
大学体育関連研修会に積極的に参加している教員
- (4) 大学体育優秀教員賞 (2016年度～)  
論文、研修会参加、FD、シラバス、授業評価
- (5) 優秀論文賞 (1997年度～、旧大学体育教育賞等)  
『大学体育スポーツ学研究』に掲載された優秀な論文
- (6) 優秀発表賞 (2015年度～)  
大学体育スポーツ研究フォーラムにおける発表

図3. 全国大学体育連合の個人表彰制度

## 4. キャリア開発の考え方とツール

全国大学体育連合は、教員のキャリア開発に関するワークショップを開催してきているが、その要点は、キャリアパスとキャリア段階について理解させ、将来設計させることである(小林, 2019)。そのためのツールの一つとして段位表がある。図4は研究の段位表であるが、このほかに教育と学内運営、社会貢献の合計4領域の段位表が作成されている。段位を判定する基準と職位の目安が示されているので、自分が最終的に、そして、何歳までにどの段位までに到達したいのかを考え、4領域におけるキャリア開発について計画することができる。

研究の段位表			
段位	事項	年(年齢)	目安
8段	国家の科学技術基本政策を策定遂行できる。		教授
7段	独自の研究領域を提案し、予算枠を獲得できる。 (国や日本学術会議の委員を務める)		教授
6段	研究領域を代表して組織を率いる。 (主要学会の会長を務める。)		教授
5段	研究領域で不可欠な人材となる。 (学会誌の編集など学会の運営に携わる。)		教授 准教授
4段	独創的な研究を着想遂行できる。 (学会でシンポジストや招待講演者を務める。)		准教授
3段	自分の名前で研究費を獲得できる。 (論文が学会誌に掲載される。)		博士
2段	自らテーマを見つけ仮説を立てられる。 (学会で発表する。)		修士
初段	与えられたテーマで実験して結果を出せる。		学士

図4. 研究の段位表

そして、大学教員の枠を超えて、学者としてのあり方を考える際に、マクファーレン(2021)が示した「知のリーダーシップの類型」が参考になる(図5)。「学問の自由の行使」(横軸)と「学者の責務の対象」(縦軸)をクロスして、知のリーダーシップを4類型(知識生産者、市民性ある学者、知の越境者、公共の知識人)に分けている。このような視点からも自分の将来像を描くことも必要である。

人)に分けている。このような視点からも自分の将来像を描くことも必要である。

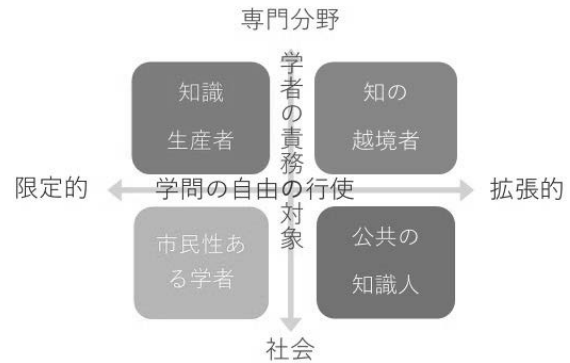


図5. 知のリーダーシップの類型

日本社会が Society5.0に向かおうとしているときに起きたコロナパンデミックは社会のデジタル化を加速し、価値観に大きな変容をもたらしている。外部環境の変化に対して、「複雑で不透明すぎてなす術が無い」と引きこもっているのではなく、「ピンチをチャンスに変える」姿勢こそが肝要である。そこで、戦略的マネジメントが必要になる。教養体育の戦略的マネジメントについての研修教材(30分)を YouTube で公開しているので是非参考にさせていただきたい(図6, 小林, 2014)。その中で紹介している SWOT 分析は組織だけでなく個人にも応用できる(図7)。自身の強み(S)と弱み(W)、そして、外部環境の機会(O)と脅威(T)からなる4つの象限について考えられる戦略を書き出し、それらの中から「選択」し、それに資源を「集中」する手法である。今は大きな変革を起こす絶好の機会である。

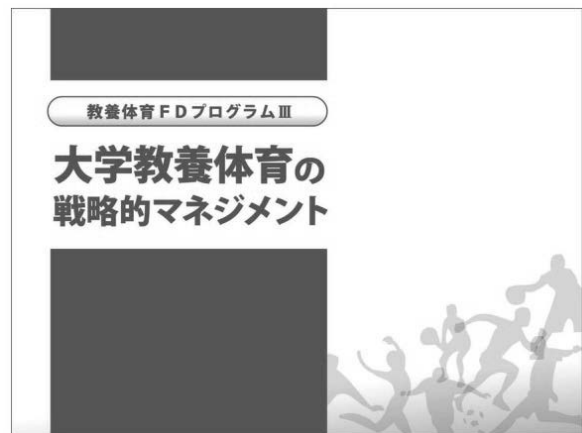


図6. 大学教養体育の戦略的マネジメント



		内部要因	
		Strengths (比較優位・強み)	Weakness (比較劣位・弱み)
外部環境	Opportunities (成長機会)	成長戦略 ・集中戦略 ・多様化戦略 ・連携戦略	改善戦略 ・内部強化戦略 ・ヘッドハンティング戦略 ・外部委託戦略
	Threats (致死脅威)	回避戦略 ・無投資戦略 ・暫時撤退戦略	撤退戦略 ・引き上げ戦略 ・身売り戦略 ・精算戦略

図7. SWOT 分析

### 5. 大学教育のDX

2020年、新型コロナウイルス感染症が拡大する中、アメリカ創価大学の学長として対応に尽力した高橋宏は、その経験から、「新型コロナウイルス・パンデミックは、全世界のあらゆる人々に大きな影響を与える中で、世界の高等教育機関に対して、教育・学修の新たなパラダイム転換を迫っている。」と述べている（高橋，2020）。そして、従来の対面指導重視を根底から覆し、教育のDXによって「AI等の高度・先端技術を応用し、対面指導に加えたバーチャルな学修方式を導入し、学修アナリティクスを活用することによる学修の個別最適化・協同学修推進こそが真に学修成果を極大化できるとの認識を一気に常態化する。」と今後の変化について述べている。実技重視の体育もそのあり方を再考する時を迎えているのである。

そして、このコロナパンデミックは大学教育にとどまらず、大学そのもののあり方にまで変化をもたらそうとしている。吉見（2021）は大学の歴史を振り返り、ギルド的な中世の大学から近代の国民国家の大学、グローバル化が進んだ現代の大学を経て、今後はグローバル化がさらに進展し、「地球社会の大学」へと発展すると予想している（図8）。このような歴史的、そして、グローバルな視点からも体育の使命や自身のキャリアについて考えることが重要である。

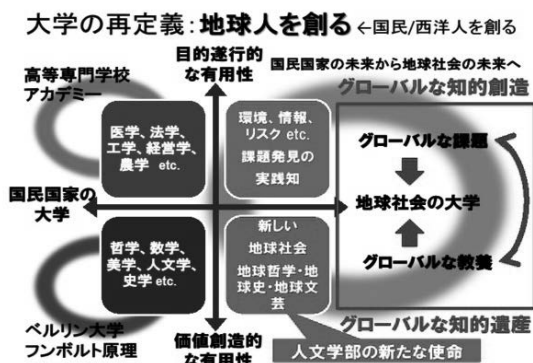


図8. 大学の再定義

最後に、我々が直面しているデジタル化について参考になる考え方を紹介したい。ハーバード大学のプエントドゥラ教授のSAMRモデルである（図9，Puentedura, 2013）。ICTによって教授学習方略が発展する段階を示したもので、単なる代替措置（S）から教育改善の拡大・強化（A）、変更・改造（M）、新しい役割の創造・再定義（R）の4段階からなるモデルである。私たちはコロナによってオンライン教育を余儀なくされ、デジタル化に取り組んだ。その結果、第2段階までは進んだのではないだろうか。しかし、単なる代替措置であれば、コロナが収束すれば元に戻るであろう。デジタルシフトではなく、デジタルトランスフォーメーション（DX）となるには第3段階へまで進まなければならない。体育でも第3段階以上の先進事例も現れた。詳しくは北，小林（2021）をご覧ください。

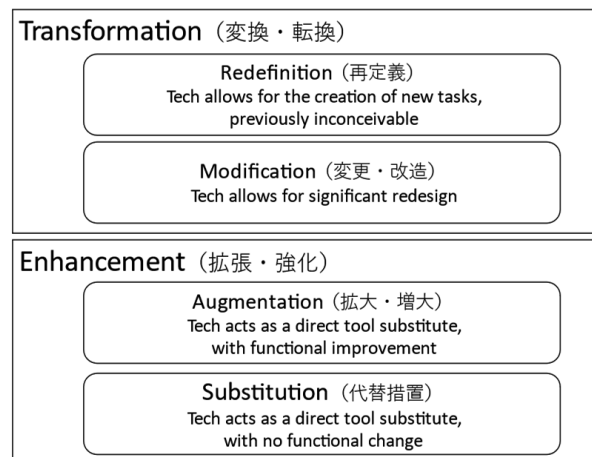


図9. SAMR モデル

### 参考文献

北徹朗・小林勝法・北村勝郎・中山正剛・田原亮二・平工志穂. DXによる大学体育の未来. 大学教育学会誌, 43 (2) : 114-118, 2021.

小林勝法・山口一美. 大学教養体育のFDプログラムの体系化. 文教大学教育研究所紀要, 21 : 81-88, 2012.

小林勝法. 教養体育の戦略的マネジメント, 2014.  
<https://www.youtube.com/watch?v=cJZq2z6oC7k> (2022年8月10日参照).

小林勝法. 大学教養体育教員のキャリア開発. 大学体育, 113 : 60-63, 2019.

小林勝法. 2020年度にあった体育・スポーツの教員・研究者公募の状況, 大学教養体育教員のキャリア開

発. 大学体育, 117 : 84-87, 2021.

高橋宏. アメリカ校で COVID-19に立ち向かって  
〈上〉. 教育学術新聞, 2020年 8月19日付け.

ブルース・マクファーレン著 (齋藤芳子・近田政博  
訳). 知のリーダーシップ-大学教授の役割を再生  
する. 玉川大学出版部, 2021.

Puentedura RR. SAMR: Moving from Enhancement to  
Transformation, 2013.

[http://www.hippasus.com/rrpweblog/archives/2013/  
05/29/SAMREnhancementToTransformation.pdf](http://www.hippasus.com/rrpweblog/archives/2013/05/29/SAMREnhancementToTransformation.pdf)  
(2022年 8月10日参照).

吉見俊哉. 第三世代の大学とは何か. 大学教育研究  
フォーラム (オンライン, 2021年 3月17日講演資  
料), 2021.

— 優秀発表賞 —

## 優秀発表賞を受賞して

中村学園大学 田村 孝 洋



この度、九州地区大学体育連合の主催する春期研修会で令和3年度「優秀発表賞」を受賞することができました。この選考に携わっていただきました先生方ならびに会員の皆様に対しまして、この紙面をお借りして感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございます。

受賞題目は「大学体育授業におけるルーブリック評価表作成の試み」です。この内容は、昨今関心が高まっている体育授業でのルーブリック評価に関する研究となっています。本研究を進めるにあたり、私が所属する中村学園大学の西田明史先生のお力添えをはじめとして、授業を受講した学生にも沢山の協力をいただきました。この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。本稿では、本研究の特徴であるルーブリック評価表の作成手順の一端をご紹介させていただく機会とし、今後のスポーツ・体育教育の学修評価に対する一助になれば幸いと存じます。

### 体育のルーブリック評価表の普及を目指して

ルーブリック評価表は、近年の大学教育における中

心課題である「教育の質の保証」のために導入が進められているものです。最初の提言は、中央教育審議会(2012)によって行われ、大学教育の質的転換に向けて学修評価の公平性や透明性を確保するための方策の一つとして、その重要性が説明されました。しかし、最初の提言より10年が経過した現在、大学教育におけるルーブリック評価表の実施率はまだ高いとは言えません。実際、本学教育学部における令和3年度の実施率は23%、令和4年度前学期の実施率は36%であり、導入が進んでいるとは言えない状況にあります。

このように導入が進まない主な問題は、濱名(2012)が指摘しているように、①テスト等の定量的評価に比べると作成に手間がかかることにあります。また、②ルーブリック評価表を作成するだけでは評価者間の誤差が完全には無くならず、継続的に評価者間の誤差を調整し続けることの必要性も述べています。

私は、このルーブリック評価表の導入が大学の方針として示された当初、その概要を理解するところから苦勞いたしました。また、いざ作成の段階となるとさらに苦しみを覚えることとなりました。この苦い経験

表1. 教員が設定した評価項目

評価項目	内 容	学力三要素
a. スポーツに関わる基本スキルの実践	周囲の状況（ボールや相手などの動き）に応じた自他の役割を理解した上で、必要とされる個人的スキルまたは集団的スキルをゲームの中で実践できる。	・知識 ・技能
b. スポーツが有する価値や特性の理解	基本技術や戦術、教材となるスポーツの魅力や特有の面白さ、ルールや審判法、用具の適切な使用法や環境構成を理解した上でゲームを運営できる。	
c. 豊かなスポーツライフの実現	意欲的に身体を動かす中でスポーツの楽しみ方や健康の保持増進効果を体感し、評価・判断した上で次の学習機会（授業など）や日常生活において活用できる。	・思考力 ・判断力 ・表現力
d. 学習行動	態度もまじめであり、授業内容の理解を深めるための取組（教材に関する諸理論の予習、自他の経験との接続、目標・活動計画の設定など）を実践できる。	
e. 意見の聴取	他者の意見を聞きながら授業内容の要点や個人・グループの学習状況（運動特性の理解度・スキルの習得度など）を整理できる。	
f. 意見の伝達	授業内容の要点や個人・グループの学習状況（運動特性の理解度・スキルの習得度など）を踏まえた上で他者の立場を尊重した発言ができる。	・主体性 ・多様性 ・協働性
g. 協働性・倫理性	運動特性の理解やスキルの習得に向けた個人・グループの学習がよりよく進むような約束事や場を設定し、役割を調整・分担することができる。	

から、いかに簡便かつ合理的に作成を進めるのかを考  
えるに至りました。その試行錯誤の結果が、本研究で  
試みた『教員と学生によるルーブリック評価表の合同  
作成』という形になります。この最大の特徴は、教員  
が設定した7つの「評価項目」（以下表 a～g）に対  
して、学生の考える「評価基準」を反映するという作  
成方法にあります。

具体的には、学生は全授業終了後に各評価項目に対  
して S/A/B/C/D の5段階で自己評価を行い、その理  
由について自由記述（100～200字）による振り返り  
を行いました。本研究では、この自己評価と振り返り内  
容の関係を計量テキスト分析によって整理して、学生  
の評価基準として活用することを可能にいたしました。  
この度、賞をいただいたポイントは、この作成方  
法の独自性や着眼点にあると考えており、完成した評  
価表は学生の実態から乖離しにくいことが活用上のメ  
リットと言えます。

本研究では、学生に対する教育の質の保証という観  
点からルーブリック評価表について研究を進めまし  
た。学修評価の在り方は、私の学生時代と比較して明  
らかに進んでいると言えます。しかし、まだ確かな評  
価方法が確立されておらず発展途中也と言えます。本  
研究の成果が少しでも今後のスポーツ・体育授業のお  
役に立てると幸いです。

### 参考文献

中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の  
質的転換に向けて ― 生涯学び続け、主体的に考  
える力を育成する大学へ ―（答申）2012,  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/  
toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.  
pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf).（参照日2022年2月14日）

濱名篤. ルーブリックを活用したアセスメント. 文部  
科学省中央教育審議会高等学校教育学部会資料6.  
2012, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/  
chukyo/chukyo3/047/siry/\\_icsFiles/afield-  
file/2012/12/07/1328509\\_05.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siry/_icsFiles/afieldfile/2012/12/07/1328509_05.pdf).（参照日2022年2  
月22日）